

特集にあたって

高 木 裕

平成23年9月16日に、新潟大学人文学部研究プロジェクト「声とテキスト論」の主催で、国際シンポジウム「〈声〉の制度 — 継承・障害・侵犯 —」が開催され、活気に満ちたシンポジウムとなった。今回はこのシンポジウムの開催の趣旨説明とその報告をさせて頂く。

われわれのプロジェクトでは、これまで、〈声〉の諸相にさまざまな分野（各国文学、哲学、文献学、表象文化論、メディア論）からアプローチし、〈声〉の文化、音声言語と文字言語、口承とテキスト、テキスト生成、テキスト解読などの問題を深め、新たな人文学の構築を目指してきた。このプロジェクトはいわゆる「テキスト論」という文学理論的な領域のみにとどまることなく、〈声〉とテキストとが織りなす濃密で深い関係に光を当ててきた。

この「濃密で深い関係」は、文学テキスト創造の起源から生まれ、そこから新たな文学表現がたえず生み出されてきた。一方、〈声〉の元来の表現の豊かさは、その豊かさゆえに、古代の書記言語（エクリチュール）の発明から、現代の音声メディアの登場による〈声〉の再創造に到るまで、長い歴史の中で、さまざまな制度的な制約、規制、侵犯を受け、〈声〉が有している身体的な表現ニュアンス、根源的なパトスへの働きかけ、記憶喚起に関わる機能、無意識の領域への浸透力、想像力の刺激など、つまり、文化創造に関わる豊饒な力を、ときには剥ぎ落とされ、ときには封印されてきた。しかし、この豊饒性を取り戻そうとする試みは、近世・近代文化に特徴的に見られるところで、たとえば、ジャン＝ジャック・ルソー、そしてロマン主義は、〈声〉に原初的な表現力を見いだし、同時に書記言語の音声に注目し、音楽性を追究して行く。この事象を、デリダによる西洋形而上学の音声中心主義（フォノセントリズム）批判の視点でとらえることもできるし、〈声〉のアウラの持つ危険性につねに目配りする必

要もあろう。しかしながら、〈声〉は西洋形而上学の伝統の上にもみあるわけではない。〈声〉は、あらゆる伝統文化の中で、〈声〉にならない〈声〉の体験領域さえも含み入れながら、綿綿と息づいているのである。現代においては、〈声〉の問題への注目は、文学のみならず、「ことば」「音響」「映像」の上で成立しているあらゆる文化に広く認められるところである。

現代は、言語表現あるいはメディア表現では表現しきれないものを、逆に〈声〉の豊かな機能の中に見いだそうとしている。それは、身体性と切り離すことができない、自我の内奥に深く根ざしたものである。古来、〈声〉は、宗教的儀礼、祭礼、歌垣、神話の語りに大きな役割を果たしてきた。呪術的な力から、癒しの力に到るまで、人間精神の根底に直接響く力を有していた。このような力の復権は、現代文化のさまざまなジャンルに見られるところであり、現代文学はこの力を言語表現によっていかに伝えうるかという問題から出発し、〈声〉の現前性のシミュラクルを纏うために、制度的な、慣習的な規範を破り、新たな言語芸術を創造し続けている。

今回のシンポジウムの目的は、〈声〉の文化が、これまでの歴史の中で、書記言語との攻防から始まり、制度的なさまざまな制約と葛藤、軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに、文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力、豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか、その諸相を例示し、〈声〉から、いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを、明らかにすることであったが、ボルドー第3大学のジョブ先生の御講演から、第2セッションの発表に至るまで、みごとに〈声〉の可能性を例示するものであった。

第1部は、ボルドー第3大学の研究部門の代表者であるマルティヌ・マチュー＝ジョブ Martine Mathieu-Job 教授による講演で、演題は「言語の単一性の下におけるフランコフォニーの声の多様性」*Sous l'unicité de la langue, la diversité des voix francophones* であった。旧フランス植民地の国々で生まれたフランス語圏の文学は、植民地であった時代の記憶を掘り起こし、現地の人々がフランス語という言語の「単一性」のもと、いかに制度的抑圧を受けたかを語ることから始まり、さらに宗教的抑圧、性の抑圧についてもふれる。講演では、そのことを証言する文学から、フランス語圏の文学が、80年代から、自伝的文

学（特異な〈声〉の合唱）へと移行してゆく過程をたどる。この変化の中で、物語の力の危機が訪れるが、そこでフランス語圏の作家たちは、あえて、みずからの声にひび割れを入れ、そこにいくつかの〈声〉（アラビア語、ベルベル語、幼年期の女たちの声、抑圧されたパロール）を横断させ、忘却の中に埋もれていた、あるいは無意識に潜在する言葉を引き出し、その言葉の多様性によって、新しい文学の可能性を探ろうとする。講演は、言語の単一性が抑圧していたさまざまな〈声〉が、フランス語と現地の言葉との軋轢と融合の歴史を経て、作家たちの眠っていた記憶を掘り起こし、豊かな文学創造に至ったことを鮮明に示すものであった。

第2部では以下の研究発表があった。

佐々木充 Establishment of Voice and Departure from It: The Cases of Confucianists in 17th-18th century Japan（発表言語は英語）（「〈声〉の制度とその逸脱—初期江戸儒学の場合—」）

逸見龍生 Discours et autorité : stratégie textuel dans l'Encyclopédie de Diderot（発表言語はフランス語）（「言説と権威—『百科全書』における言語戦略」）

中里まき子「裁かれるジャンヌ・ダルク：20世紀文学における〈声〉の問題」（発表言語は日本語）

石田美紀「〈声〉と〈声もどき〉—複製技術時代の主体」（発表言語は日本語）

いずれの発表も力のかもったもので、〈声〉の制度とエクリチュールとの闘ぎ合い、百科全書の言説の解説から浮かび上がる多声的なエクリチュール、ジャンヌ・ダルクの〈声〉という伝統的な主題の現代文学における再創造の中から見えてくる言葉への不信、21世紀の「ボーカロイド」の〈声〉が生み出す主体の構築など、〈声〉をめぐる制度の継承あるいは侵犯から、新たな、そして豊かな文化創造が生み出されてきたことを再認識させるものであった。発表原稿は、「国際シンポジウム「〈声〉の制度—継承・障害・侵犯—」発表報告集」（人文学部）に掲載されているので、詳しくはこの報告集をお読み頂きたい。